

# 武蔵大学 2007 年度「生活指導研究」(加藤聡一)

## 提出課題より 15 例 (一部省略・修正)

### 【これからの生活指導】

フナ

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロロキウム課題)

#### ○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (6) 年生	② 中学・高校・大学 (福井県立福井農林高等学校)	③ 地域・社会 (福井県 三方町、若狭町)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006 年。 「湖から産卵にあがる魚からの黄信号」(pp. 165 -173)	日本水大賞 福井県立福井農林高等学校 環境土木部 「農業水路への設置を目的とした小規模水田魚道の開発による環境保全活動」	若狭町役場ホームページ <a href="http://www.town.fukui-wakasa.lg.jp/">http://www.town.fukui-wakasa.lg.jp/</a> 行政ホームページ 自然と環境保全
実践の概要	ある雨の日、田んぼや水路にフナが沢山あがり、フナを先生と生徒で捕りに行く事から始まった。  1、それを持ち帰り、自分たちも参加をし料理をして、体のしくみ、生命力を感じる。 2、身近にある田んぼやフナ、コイなど生き物についての関心が生まれる。 3、生き物について調べていくうちに、環境汚染、水質汚染、人間が行ってきた環境破壊を肌で感じる。	農業水路の自然生態系の調査から始まった。  1、水田地帯の魚類に着目し、水路のネットワークを回復させ、水田地帯の生態系を保全、復元させる為に「小規模魚道」を開発した。 2、魚類の良好な生息環境を回復させる為に魚道の制作上の留意点踏まえ実行した。 3、様々な実験をし、環境を変えたりして水路を模索した。	田んぼで卵を産んだり、えさを食べたりする魚類の為に、人間は今何をすべきなのかから始まった。  1、排水路から田んぼまでの高低差が大きくなったため、魚たちが田んぼへ入ることが難しくなっている事に際し、生き物の命について感じる。 2、水田魚道を設置する。 3、子供たちに水田魚道を紹介し、湖から川、水路そして田んぼのネットワークをもう一度つなげることで、生き物の豊かな水辺を再生していこうとする。
実践の中の生活陶冶	子供たちの驚きや発見から、魚の生態を追求する事によって、自然や環境問題を考える事に繋がっていく。 また、食べるという事で地域の文化や歴史にも触れるようになる。 地域の環境問題を見つめ、水質汚染問題も含め自らが考えていくようになる。	生態系を身近に考え、人間と同様に命を大切に扱っていかねばならないと感じるようになる。 また、環境問題から水質汚染まで真剣に考え、自分たちは何が出来るのか、生き物に対して何が出来るのか、自ら考え、実行するという行動力が備わった。	田んぼで生まれ育つ魚の事を考える事によって、命の大切さと共に、環境について考えるようになった。 そして、地域の伝統や歴史について触れていく事により、地域を大切にしようという気持ちが生まれるようになる。 地域の豊かな自然を守っていくように自覚し、それが総合的な環境問題を考える事に繋がっていく。

	<p><b>②からみた教育的意味</b></p> <p>②では自ら考え、実践していった。それは、小学校時に環境汚染、水質汚濁に対する経験を肌で感じ取った事もあり、現場を知っていた事に非常に意味があるように感じられる。</p> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <p>身近で環境について考えさせる事によって、町にある田んぼについて、そしてそこで起こっている問題について、地域の伝統を大切にしようという気持ちと共に小学校時からこの考えを植えつけられたのではないか。</p>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <p>小学校時に現場を経験させる事によって、何かをしなればという実行に移そうとする意欲を掻き立てるようになった。そして知識などを豊富にし、実行に移そうという実状に至った。</p> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <p>地域に対して何が出来るのかという事を感じ、地域の伝統を重んじ、地域に対して何か貢献したいと努力した点に意味が見出せる。</p>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <p>町の自然を守ろうと考えさせる事によって、小さい時から地域を大切に、地域に貢献していくように考えるようになった。</p> <p>また、環境問題の深刻さも肌で感じる事が出来た。</p> <p><b>②からみた教育的意味</b></p> <p>地域の自然環境の大切さ、また命の大切さを教え、高校時に実行するように生徒の気持ちを運んでいった事に②へ対しての教育的意味を感じる事が出来る。</p>
--	--	--	---

### ○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

教育とは様々で、教師が壇上で生徒に話す事だけではない。時には自らで体験させ、時には生徒主体で話し合いの場を持たせるという事も非常に大切な事である。今回の件で言えば、環境汚染、水質汚濁に関して教師が教科書を読んでただ生徒に教えているだけではなかなか伝わりづらい。地域から学校まで協力し、ネットワークを作り、生徒に生で現状を経験させ、肌で感じさせた方が有効であるのではないかと感じた。実際見て、現場を知ることにより、描けるものも曖昧な想像からはっきりした構図に変わり、自ら考える力が生まれていくと思う。探究心と共に、今自分たちは何が出来るのか、という自ら学び、自ら考える力が自然と身に付いていくという事が、今回の実践の意義であると感じた。

私自身も教育実践をするのであれば、実際に見たり、聞いたり、と生徒に直接体験させていきたいと思った。実践を実行するにあたって、その事に関する知識を教えるから実践を行うか、また実践をした後に知識を教えるか、というのは臨機応変に考えなければならないが、実際に生徒に肌で感じさせるという事の大切さは今回の授業、レポートを通じて一番に理解出来た。

自主性を尊重出来る素晴らしい実践を自身がもっと勉強して、生徒にしてあげたいと感じた。一生の糧になる、記憶に残る実践をしていきたいと思った。

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校（5）年生	② 中学・高校・大学 (筑波大学付属中学・高等)	③ 地域・社会 (千葉県・佐倉市)
出典 および 参考 資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006 年。 「水田作りからの総合学習－地域の明るさを見出した子どもたち」 (pp. 109 -116) 北海道・芦別市立芦別小学校	筑波大付属駒場中・高等学校 水田学習の総合学習化 <a href="http://www.mext.go.jp/a_menu/shouugai/houshi/jirei/03071401/025.pdf">http://www.mext.go.jp/a_menu/shouugai/houshi/jirei/03071401/025.pdf</a>	「地場産の米でパン作り－米の消費拡大への期待－」 <a href="http://www.kanto.maff.go.jp/chiiki/genchi/gj0512/05120000mokuji.html">http://www.kanto.maff.go.jp/chiiki/genchi/gj0512/05120000mokuji.html</a>
実践の 概要	田植えと稲刈りの体験。 学校の一部を使用して田んぼを作る。地元の稲作農家で、減農薬・無農薬の米作り取り組んでいる人に協力していただく。 ①水田作り→代かき→田植え ②育てるための調べ学習、夏休みの活動。毎日の日直の仕事として、「水田データ」の記入。また各自用に「水田日記」を用意。これを基本にして観察を続ける。 ③稲刈り（稲刈りに向けて、協力者の方の実際の水田を訪問） ④脱穀・籾摺り ⑤まとめ・学習総合発表会 稲作の現状、「米」のこれからについて考える。	中学 1 年生と高校 1 年生がそれぞれクラスごとに 場を決めて、分担耕作をする。4 月～12 月まで、稲作の様々な作業を水田委員を中心として行う。 収穫した米は、餅つきで利用するほか、卒業式・入学式の赤飯や地域への配布に使用される。 学校内に水田担当教官を配置。栃木県の農家に基礎作業などを依頼し協力をしてもらう。 これらの体験活動、教科活動を通し、それぞれの水田稲作に関わる何らかのテーマを設定し、1 年間かけてレポート作成に取り組む。文化祭での研究・展示も行う。	地場産の米でパンづくり。米の消費拡大への期待。 平成 14 年度から米の消費量削減に歯止めをかけ、地産地消の普及を図る目的で地場産の米を使用した米粉パンの開発に取り組んでいる。 安定した製パン技術の確立を図るために、和洋女子大学食品加工研究室や地域の婦人会に研究を依頼。佐倉市の工場の協力を得て、地場産の米粉を使用したケーキやパンの試作品を地域の祭りや集会、市役所の売店、学校給食で試食してもらうほか、販売して PR 活動を行っている。
実践の中 の生活 陶冶	稲を育てていく中で生まれてくる問題を解決しながら進んでいく。 育てていく過程を体験することで、農業と自分たちの米作りに差が生まれてくる。これが次の学びにつながる。 米がどうやって生まれてきているのか体を通して体験する。 米を通して先人の苦勞と知恵に触れる（脱穀・籾摺り、農業の機械化）。 農業危機について学ぶ。米の生産・消費、輸入の関係、食文化の変化。現在の稲作を取り巻く社会の状況にとまどいながらも芦別の稲作を見つめ、地域の力を見出していく。	日常触れることのない農業体験を通して、日本の伝統的産業への理解を深める。様々な共同作業を体験することで勤労体験や共同作業の重要性を認識する。水田という空間を利用した教科学習への理解を深める。  教科活動とのつながり。 国語：米と自然環境に関する説明文の読解 社会：米をめぐる政策。これからの米作りについて。 数学：種籾の個数と収穫時の籾の量の計算法。面積とその単位換算。仕事山。 理科：水田や河川の水について。稲を含む単子葉植物のつくりについて。	小麦粉ではなく米粉を原材料に使用することや、県内に製粉施設がないためコストがかかり価格が高くなる等の課題がある。しかし米粉パンの需要拡大で、米の消費量拡大、及び地産地消につながる、地元農業の担い手確保の助けになる可能性がある。 地域が一体となり、それぞれの長所を生かした取り組み。

		英語：日本の米と海外との関係を学ぶ。英語によるコミュニケーション。農業問題について。	
	<p><b>②からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際の体験学習を通して、身近なことへの興味や目的が広がる。</li> </ul> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動を通して、様々な問題に直面する、その問題を解決するための方法や考え方、アイデアを実社会から学ぶ(道具・知識・目的)。</li> </ul>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・稲作の作業や体験が教科の学習につながっているということの認識。</li> <li>・ひとつの事柄も広い視野で学ぶと様々なことが見えてくる。</li> </ul> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・普段触れることのない農業体験を通して伝統的産業への理解を深める。</li> <li>・共同作業を体験することで、働くことの体験、共同作業の重要性を認識する。</li> </ul>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ぶ対象が目の前(身近)にあることでより積極的に実践的に学習することができ、共同で作業しながら成長できる。</li> </ul> <p><b>②からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>より深く、広く問題を見つめなおすことで、課題解決に向けた方法や考えを学ぶ。</li> </ul>

○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

今回は「米」に関する内容を扱ってみたが、ひとつのテーマからでも、様々な角度から見ることで学びの視野をあらゆる方向に広げていけることができるんだと感じた。学校で学んだことを自分の地域や生活に当てはめて考えていくということはとても難しいことだと思う、しかしこのようなことを踏まえた生活指導を行うことができれば、現代の社会における様々な社会問題などは解決につながるのではないかと思う。それぞれの生徒が未来につながる生活共同体の中で生活する実践をすること、そのような学校づくりもこれからは必要なのだと思う。

これからの自分の教育実践に活かそうと思うことは、ひとつの事柄に関しても、狭く考えずに横の広がりを考えていくこと。これは現代の企業においても言えることだと思う。横の広がりのある生活共同体を形成し、そしてそれが縦につながっていく、未来がみられるような指導を行っていかねばいいと思う。

# 【これからの生活指導】

水田 2/5

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロキウム課題)

## ○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 ( ) 年生	② 中学・高校・大学 (筑波大学)	③ 地域・社会 (広島県庄原市)
出典 および 参考 資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006 年。 「水田作りからの総合学習」 (pp. 109 -116)	筑波大学 生物学類 生命環境学群「生物資源科学入門」 <a href="http://www.biol.tsukuba.ac.jp/tjb/Vol6No2/TJB2007EA10211.html">http://www.biol.tsukuba.ac.jp/tjb/Vol6No2/TJB2007EA10211.html</a>	平成 19 年 4 月 庄原市水田農業推進協議会「庄原市水田農業ビジョン」 <a href="http://www.city.shobara.hiroshima.jp/download/6368/suidennbijyonn.pdf">http://www.city.shobara.hiroshima.jp/download/6368/suidennbijyonn.pdf</a>
実践の 概要	土掘り・運び出し・石とりの作業を経て、水田を作り、「今日の水田データ」「水田日記」をつけながら稲の生長を観察することとどまらず、生徒たちの手で台本を書き劇として発表した。また、協力してもらっている山本さんの水田を訪問し、質問をしたり農家とのレベルの違いを感じ取ったりした。台風の被害を受けたが、授業参加の日に稲刈りをし、さらには手作業での脱穀・籾摺りを体験した。最後にまとめとして芦別市における稲作の現状について学習した。	目的：農業及び物流の歴史、土壌・水資源及び地球規模での物質循環、微生物資源・植物資源・動物資源の利用の歴史と現状など、生物資源科学の基礎をわかりやすく解説し、生物資源科学を学ぶことが、食糧・環境・国際開発などの地球規模的課題を解決するために極めて重要であることを理解させる。授業内容：稲作・畑作の歴史と現代、循環型社会の成立と解体、生物資源を育む土壌資源と水資源、生物資源の生産・利用と環境との調和、微生物の様々な分野への利用、わが国・世界の米生産と稲作技術など。	平成 22 年度まで、今後の米政策及び水田農業政策について、地域の作物販売戦略、水田の利活用、担い手の確保・育成などの将来計画を明確にし、持続的な水田農業の確立を図るものとする。米づくりをはじめとして土地利用型作物の全てにおいて生産履歴と土づくりを実践する安全・安心な持続的農業の展開、及び地域農業の担い手としての個別経営体や地域営農集団、農業法人などの組織経営体が、農地集積、作業受託が行なえる地域の水田農業を担うシステムづくりを柱とした「地域水田農業ビジョン」を策定する。
実践の 中の生活 陶冶	班活動において、コミュニケーション力。水田データを書くことでの数的処理力。水田日記を書くことでの観察力。手作業を行うことによって先人の知恵、機械を使うことで現代の優れた技術を知りえる。芦別市の稲作の現状を知ることで郷土に対する関心や問題意識が芽生える。	生物資源学を学ぶことにより、固定観念に囚われない幅広い視野・新しい視点を持って農業に向かうことができる。商売としての農業だけでなく、ひとつのサイクルとして生物の育成を捉えることができる。日本と世界を稲作について学ぶことで、自分のことだけを考えるのではなく国際的な感覚を持つ。	持続的な水田農業の確立を目指すことで、自分だけのこととせず未来との繋がりを感じとる。地域に焦点を当てるため、郷土愛・自分が地域の担い手であることを自覚する。安全ということを目指すため、営利に走らない姿勢が培われる。水田のよりよい活用法を考えることで、柔軟な思考が育まれる。
	②からみた教育的意味 農業がどうやって行われるのかという基礎を知ること、発展的な歴史や国際的な話にも対応できる。実体験によって、微生物など目に見えないものにおいても実感を持てる。 ③からみた教育的意味 ひとりではなくさまざまな人とかわることで、地域などより大きな規模においてもコミュニケーションを図れる。地域の歴史を学ぶことで、当事者意識を持つことができる。	①からみた教育的意味 どうして稲が育つのかという根本的なことを知っているため、より主体的な活動となる。今というだけの狭い視点ではなく、歴史・世界など広い規模の一部分を担っているという姿勢で取り組める。 ③からみた教育的意味 生物資源科学を用いて根源的に農業を行うことで、より持続的で安全な農業を目指す。世界の稲作技術を知ること、地域に生かせる新たな手法を見出すことができる。	①からみた教育的意味 利活用や安全性を追求するので、創意工夫を持って活動に取り組める。地域としてのまとまりを大切にするため、他者と助け合うことを是とする態度を養うことができる。 ②からみた教育的意味 将来のビジョンを描くことで、具体的にどのような技術・情報が必要なのかということが明確にわかる。持続的な農業を目標としているため、根本的なところからの稲作を目指す姿勢が培われる。

## ○ コロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

「これを教えるんだ」という教師の一方的な、ある種押し付けとも言えることだけが教育なのではなく、生徒の中に「芽生えさせる」ことも教育なのであるということ学んだ。

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	② 小学校（5）年生	②近畿大学 (物理工学部生物工学科堀端研究室)	③ 地域・社会 (ウガンダの取り組み)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あつ！こんな教育もあるんだ』新評論、1996 年。「水田作りからの総合学習―地域の明るさを見出した子どもたち」(pp. 109 -)	近畿大学HP <a href="http://www.kindai.ac.jp/">http://www.kindai.ac.jp/</a>	外務省 <a href="http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html">http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html</a> 独立行政法人国際協力機構 JICA・HP <a href="http://www.jica.go.jp/Index-j.html">http://www.jica.go.jp/Index-j.html</a>
実践の概要	「稲刈り体験」 ① 水田作り ② 代かき・田植え ③ 調べ学習・観察 ④ 地域のひととの交流 ⑤ 稲刈り (台風の影響) ⑥ 脱穀・籾摺り (昔の手法→機械) ⑦ 等級付け (農協の方の協力) ⑧ 試食 ⑨ 体験事後学習	キャンパスの近くに、実験のための水田を有し、そこでは“イネ”を研究材料とし、遺伝子組換え技術を用いて、植物の機能を最大限に発揮させるための研究を行っている。“植物”というシステムを遺伝子レベルで解明し、また改良することで、最終的には人間にとってより有益な特性を持つ“新たな品種”を育てていこうという考え。例えば“収穫量”など、生物の重要な特徴となる形態や性質は、一個の遺伝子の働きのみでなく、複数の遺伝子が情報交換を行うことによって決定さる。ということは、個々の遺伝子の機能はもちろん、遺伝子と遺伝子の相互作用、そして遺伝子のネットワークまでも解明していかなければならない。そこで登場するのが、トランスポゾンと呼ばれる“動く遺伝子”。遺伝子が動くことと研究は、どう関係しているのか考えていく。	近年、ウガンダ政府はネリカ米（アフリカの環境に適した高収量陸稲品種 New Ricefor Africa の頭文字を取った通称：日本・UNDP 等の支援の下、西アフリカ稲開発協会により開発された）を貧困削減策のひとつとして導入した。現在ほとんどの農家は肥料を使わずにネリカ米を栽培しているが、平均収量は 1 ヘクタール当たり 2.3 トンと高く、これはサブサハラ以南のアフリカにおける従来の陸稲の平均収量の 2 倍以上である。この高収量性のため、ネリカ米は稲作生産量と農家所得を増加させようとして期待されている。
実践の中の生活陶冶	・水田を作り、稲を育てていく中で生まれてくる問題を解決しながら進んでいく力。学びの原動力。 ・育てていく過程を体験することで、農業と自分たちの米作りには、差が生まれてくる。問題の発見力。 ・自らが進んで行くという積極性。 ・食べ物を一から作る工程を体験する事で、自分たちが口にしていくものがどうやって生まれているのかという疑問をもつ力。	・地球規模の食料危機を救えるかもしれないという世界的に視野を見る力。 ・環境問題への取り組みを考える力。 ・技術的困難に対して妥協することなく挑戦するという力。 ・自分が研究する事によって遺伝子組換え食品に関して他者（知識がない人）に伝えられることが出来る。 ・新技術をつかうことにより伝統技術をより深めることが出来る。	・自給自足の生活を送ることが出来る力。 ・自国の発展となる力。 ・他国の協力の重要性を理解する力。  (・ネリカ米普及を通じたコメの生産性の向上により、貧困・飢餓の削減となる。 ・米を輸入するための高額な費用の削減になる。)
	<b>②からみた教育的意味</b> 昔の手法を体験し、また現代の機械化という便利な技術を利用し互いを比べることによって開発・改良の重要性を発見する。実際に考え、体験することを通して問題やその解決の自分には何が出来るのかを見出すことが出来る。 <b>③からみた教育的意味</b> なぜ米は必要なのか、米作りを学ぶ意義は何か、農業就農人口の問題等をまず自分の地域レベルから考えることにより、世界の取り組みや問題へと視野を広げることが出来るようになる。	<b>①からみた教育的意味</b> 自分が体験したことを通じて、環境問題・社会問題へと発展させ、解決に向かって自分がどう貢献すればいいのか考えさせる。 <b>③からみた教育的意味</b> 品種改良の重要性を理解することによって世界中の飢餓をなくすための即戦力になる人物が育つ。	<b>①からみた教育的意味</b> 農業の重要性、「食」の大切さ、環境問題、輸入や輸出等国同士の条約を含め、世界中の国が協力して問題を解決に取り組んでいくことが重要ということを考えさせる。 <b>②からみた教育的意味</b> 自分の力で世界に貢献できるという取り組みに参加できる。飢餓で苦しんでいる人が世界中からいなくなるように自分は何をしたら良いのか考えさせる。

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (5) 年生	② 大学 ( 谷ロゼミ )	③ 地域・社会 (日本・環境省の取り組み)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、1996 年。 「水田作りからの総合学習—地域の明るさを見出した子どもたち」(pp. 109-)	甲南大学における循環型コミュニティの創造	環境省 HP <a href="http://www.env.go.jp/index.html">http://www.env.go.jp/index.html</a>
実践の概要	水田作り ↓ 代かき・田植え ↓ 育てるための調べ学習 ↓ 稲の観察 ↓ 稲刈り (台風の脅威) ↓ 地域の米職人との交流 ↓ 脱穀 ↓ もみすり ↓ 試食	地域環境問題の解決のために、問題の point・深刻さ・今大学生がその問題に取り組む意義を調べ、考える。そこで挙げられた環境復元と環境創造について実際に教室を飛び出し、活動を主体的に展開する。環境教育活動として、フィールド・ワークに参加し、有機農法による農作業、ビオトープ製作観察を行う。また、グローバルな活動として各国の学生と国際学生会議を開催し、意見交換しネットワーク化を図る。このような活動を通して、甲南大学を中心とした循環型コミュニティの創造を目指している。	環境省は農林水産省・国土交通省と連携して、サロベツ国立公園サロベツ地域とその周辺において「サロベツ自然再生事業」を実施している。この事業においては、農業と自然の共生を目指し、乾燥化しつつある湿原を復元し、また既に開発された農地のうち条件の整っていない土地を利用して、緩衝地や遊水池としての機能をもつ湿原を再生するなどの自然再生事業を行う。それと同時に、一体的な農地の再生も進めることにより、農業と共生した自然環境の再生と、自然と共生した農業の再生を目指す。このため、北海道開発局と共同で「サロベツ再生構想策定検討会」を設置し、サロベツ地域の自然と地域の保全、再生の理念や方向性を共有のものとするため、情報・意見交換を行っている。
実践の中の生活陶冶	① 自然に触れる。 ② 育てていく過程を体験することで、農家と自分たちの米作りの差を学ぶことで、農業の専門性や大変さを知る。 ③ 積極的に、実際に学習を進めることの重要性を学ぶ。 ④ 自分たちが毎日口にしてるのがどうやって生まれているのかを体を通して理解する。 ⑤ 協力することの重要性。 ⑥ 根性。 ⑦ 余すことなく使える稲	① コミュニケーション能力の育成 (日本の現状と世界の環境問題の実態を比較考察する。それと同時に、どのように各国と交わっていけばよいのか理解する。) ② 協力、共に学び合うこの楽しさ。(ヨコのつながりを強化でき、世界で同じ問題に取り組む仲間を見つけ、ともに目標に向かって進む励みになる。) ③ 相互援助が可能になる。 ④ 調査、データ化 ⑤ グローバル化社会における農業の重要性を知る。	① 国民の安全生活保障、国民の幸福追求といった憲法に直接関わる問題の国レベルで考え直すことによって、国民の環境問題意識を高められる。 ② 個人では交渉できない範囲を国同士で解決できるよう力を注ぐ ③ 農業の活性化 ④ 地域経済の活性化を促す

	<p>②からみた教育的意味 問題の提起、フィールド・ワーク方法、他者との交流方法、問題解決のための手段を実際に体験する</p> <p>③からみた教育的意味 将来の地域の担い手である子供たちが「芦別」を改めて捉えなおし、価値を見出すことによって、地域のすばらしさ、課題に挑む本気の勉強</p>	<p>①からみた教育的意味 環境問題へと発展させている</p> <p>③からみた教育的意味 学生同士の国際会議を通じて情報交換・問題の深刻さを考え直す。今自分たちにできることを考えさせる。学生の主体性が尊重されるため、社会の即戦力になれる。</p>	<p>①からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農業の大変さ</li> <li>・ 農業の重要性</li> </ul> <p>②からみた教育的意味 日本と世界との交流</p>
--	---	--	--

○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

環境問題という、リアルタイムの問題解決は、一つの学校から活動がはじまり、国レベルで取り組まれている。そうした今日本や世界で行われている活動を、学校の総合学習で、簡単にそして慎重に扱うところにこの問題の重要性が伺える。これを初等教育の授業で行うことで、早期から将来自分たちに課せられている問題を知り、自分たちでその解決方法を探る時間、手段を十分に悩むことができる。このような、主体性のある学びは、授業への意欲だけに関わらず、中学・高校・大学選び、将来の自分の職業選択にまで影響する。

自分の授業展開では、その場だけの問題解決にならないように、生徒自信がじっくり悩めるようなものにしたと思う。そのために注意を払うべき活動は、実際に生徒自身が観察し、考え、問題解決への道を提案できるように、本物との関わりを持たせられるように、最大限努力することだと思われる。しかし、生徒と教師の学びの視点が異なれば、その活動も単なるヤラセになりかねない。そこで、生徒自信が、興味関心をもつけられるように良質の質問をしていけたら良いと思う。



(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 22 日コロロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校（？）年生	② 中学・高校・大学 (播磨農業高等学校)	③ 地域・社会 (宮城県大崎市)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、1996 年。 村越含博「水田作りからの総合学習」地域の明るさを見出した子どもたち - (pp. 109-116)	兵庫県立播磨農業高等学校 HP <a href="http://www.hyogo-c.ed.jp/~harima-ahs/toppage.html">http://www.hyogo-c.ed.jp/~harima-ahs/toppage.html</a> 日本水大賞 HP <a href="http://www.japanriver.or.jp/taisyo/">http://www.japanriver.or.jp/taisyo/</a>	日本水大賞 HP <a href="http://www.japanriver.or.jp/taisyo/">http://www.japanriver.or.jp/taisyo/</a> 地域再生計画 HP <a href="http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiksaisei/dai4nintei/13toke.pdf#search">http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiksaisei/dai4nintei/13toke.pdf#search</a>
実践の概要	水田を作り、稲を育てていく中で生まれる問題を解決しながら進んでいく。 (水田作り、田植え、観察記録の作成、農家の水田訪問、稲刈り、脱穀・籾摺り) 地域の農家の方を講師として招き、見学、質問をし、農業と自分たちの米作りの差を知る。この差を次の学びの入り口にしている。 最後に稲作や米の現状について学ぶことで、日本全体の問題として稲作を捉えている。また、地域の価値も見出している。	平成 7 年からアイガモ水稲同時作による水稲栽培を行っている。H13 年には全国の農業高校ではじめて日本農林規格の有機認証 (JAS) を取得した。現在は、アイガモ水稲同時作だけでなく、深水栽培・米ぬか抑草栽培を行い有機認証を継続取得している。その有機水田で酒造好適米「山田錦」を栽培し、地元の醸造蔵や酒店と協力し日本酒を販売している。これは農産物の地域内循環で、栽培・加工・流通・販売による「地域づくり」のモデルとなっている。また、「田んぼの学校」として、田植えから収穫、生きもの観察会を行い、有機農法や学校の活動を地域へ紹介し、農業への理解と環境学習の啓蒙を行っている。	蕪栗沼に飛来している渡り鳥との共生策を実施。「ふゆみずたんぼ米」を無農薬・無化学肥料で栽培。H17 年「ふゆみずたんぼ」をはじめとする水田が蕪栗沼と共にラムサール条約の登録湿地として認定を受け、水鳥の保全に重要な役割を果たすと認められた。消費者のニーズを理解のための研修や、高等教育機関との連携による「ふゆみずたんぼ」農法の確立と J A 等農業者団体、生活協同組合、外食産業とのネットワーク構築の設立(地酒販売等)。農業者だけでなく地域住民等の多様な主体が参加する活動組織を地域の再生することが重要視され、小学生、営農、市民との交流のための田んぼの生きもの調査も行っている。
実践の中の生活陶冶	・水田作り、田植え稲刈り、脱穀・籾摺りが出来る	・有機栽培の水田作り、田植え、稲刈りが出来る ・米を加工し、日本酒に出来る ・販売が出来る・流通を理解する	・有機栽培の水田作り、田植え、稲刈りが出来る ・米を加工し、日本酒などに出来る ・販売が出来る・流通を理解する ・自然、動物を理解する
	②からみた教育的意味 稲作についての興味をこの時期に持ち、学ぶ楽しみを知ることが出来ること。  ③からみた教育的意味 地域のひととの結びつきを作り、また、地域の価値を見出しているところ。	①からみた教育的意味 稲作について専門的な知識を身につけ、学ぶ楽しみを知ることが出来ること。  ③からみた教育的意味 人に伝える能力を身に付けて、地域の特色となろうとしていること。地域内循環の経路を作っているところ。	①からみた教育的意味 地域のひととの結びつきを作り、周囲を巻き込んでさらに広がりを作っていること。また、地域の価値を大きく発展させているところ。  ②からみた教育的意味 人に伝える能力を身に付けて、地域の特色を担い、活性化しているところ。地域内循環の経路をさらに広げているところ。

○ コロロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

生徒自身が実際に体験して、それによって地域や社会が変わるような取り組みをしたい。自分たちが少しでも行動すれば世界は変わるんだ、という希望が持てるような実践が出来ればそれはその後も継続されると思う。

## 【これからの生活指導】

## 大根

(2007年度武蔵大学「生活指導研究」1月8日コロロキウム課題)

### ○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校（3）年生	② 中学・高校・大学 （武蔵大学の事例）	③ 地域・社会 （世田谷区「大蔵大根」の事例）
出典 および 参考資料	行田稔彦他編 1996年、『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論 世田谷特産「大蔵大根」東京・私立和光小学校（p.128～p.136-）	武蔵大学HP 学部・大学院 社会学科。 url（ <a href="http://www.musashi.ac.jp/modules/gakubu_sociology/index.php?content_id=43">http://www.musashi.ac.jp/modules/gakubu_sociology/index.php?content_id=43</a> 2008年12月23日取得） 武蔵大学授業案内 2006,2007年度版。	東京都産業労働局 世田谷 大蔵大根。 url（ <a href="http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/norin/sogoannai/siken/2002/2003-15.pdf#search=">http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/norin/sogoannai/siken/2002/2003-15.pdf#search="</a> 世田谷 大蔵大根 2008年12月23日取得）
実践の概要	3年生の総合学習の単元「地域の素材から」をテーマに「地域深検」を行い、「大蔵大根」に出会う。「大蔵」“青首”の味・形比べをしたり、「大蔵大根」を実際に抜きに行ったり、「大蔵大根」を始めとする大根の情報を集めたり、「大蔵大根」を実際に売っているお店を探したり、大根料理を作るなどの活動を行った。そうした体験や意見・情報交換などで生まれた疑問を、実際に研究・栽培している大河さんに質問し、最後に学習のまとめとして「大蔵大根・大根研究の本」を作成した。	武蔵大学では、人文地理学の授業で、農山漁村の変貌というテーマが取り上げられており、都市化や開発に伴う農山漁業の問題について学ぶことができる。また、社会学部の「都市社会学（武田直子教授）」では、地域社会の変容について、家族・産業・地域政治構造などの側面から多面的な研究がなされており、都市生活の特徴を学ぶことができる。さらに、同教授のゼミでは実際に質的調査によって収集したライフコース・データを社会構造と関連づけていく手法について学べる。	“大蔵大根”は、30年ほど前から姿を見せなくなり「玄の大根」と呼ばれていたが、ふるさと野菜を見直そうという声に呼応し、世田谷区内の各青壮年部が協力し平成9年に栽培が復活した。復活した“大蔵大根”の反響は大きく、また区内農業の振興を後押しする声も多く、世田谷産農産物のPRを推し進めようと世田谷産農産物ブランド化検討委員会が組織され、平成13年には世田谷産農産物のシンボルとしてロゴマーク「せたがやそだち」が商標登録された。
実践の中の生活陶冶	大蔵大根について理解を深めることで、農業を行うことの大切さだけでなく、地域の伝統を守ることの大切さを感じ、それを日常生活でも生かすことができ、生活を高めることができる。	開発に伴う都市の変化や問題について学ぶことで、今後そのことにどのように向き合えばよいか、解決するにはどのような対処をすればよいかという考えを生活に生かすことができ、生活を高めることができる。	大蔵大根を始め世田谷産農産物をPRすることで、農業者と都市住民の「顔のみえる」関係が築きあげられる。さらに、基盤となる、より安全・安心な農作物づくりに向け、技術支援を行う必要性も生まれる。
	②からみた教育的意味 生徒たちは、これらの経験を通じて、大根そのものへの理解・関心を深め、大根だけでなく農業全体についてなど、さらに詳しく学ぼうとする意欲が生まれると考えられる。  ③からみた教育的意味 農業だけでなく地域についての理解を深め、利益を重視するだけでなく大切な伝統は守っていこうという意識を生むと考える。また、地域の伝統を見つけ「町興し」として活用しようという意識も生まれると考えられる。	①からみた教育的意味 ①の活動の背景に隠されていた、都市型農業の抱える矛盾やその中での農家の人たちの生き方というテーマについて発展的に学ぶことができる。  ③からみた教育的意味 都市化や開発に伴う農山漁業の問題や都市生活の特徴を学ぶことができ、実際に地域・社会に出て問題に直面したときに、学習に基づいて論理的に物事を考えることができる。	①からみた教育的意味 都市農業や農産物を積極的にPRする活動を行う中で、農業者と地域住民のつながりを作ることができるだけでなく、小学校のときに学んだ地域特産の大蔵大根の知識を生かすことができる。  ②からみた教育的意味 都市化や開発に伴う農山漁業の問題に対して、都市生活の特徴を理解した上で、地域・社会がどのように解決しようとしているかという具体例を学ぶことができる。

### ○ コロロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

どの共同体の実践（特に①②）も、その内部で解決して終わるのではなく、発展的に考えることができる、また過去に振り返ったときにその経験が生かせるようになっていた。このことから、どの実践も普段の生活と繋がりを持っているということ学んだ。自分の教育実践について考えるときも生徒たちが次々と疑問を抱き、発展的に考えていけるようなものを探したいと考える。

# 【これからの生活指導】

# 馬具職人

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロキウム課題)

## ○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (4) 年生	② 中学・高校・大学 (青森→東京)	③ 地域・社会 (青森県)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、1996 年。 「馬具職人のほなし」(pp. 94-100)	★青森 中学校 美術教育の実践 <a href="http://homepage3.nifty.com/art-of-life/chutou.htm">http://homepage3.nifty.com/art-of-life/chutou.htm</a> ★武蔵大学比較芸術演習 <a href="http://www.musashi.jp/syllabus/2007/L6340.html">http://www.musashi.jp/syllabus/2007/L6340.html</a>	★青森県 馬市まつり <a href="http://www.city.tsugaru.aomori.jp/kankou/ibento.html">http://www.city.tsugaru.aomori.jp/kankou/ibento.html</a>  ★馬市まつり <a href="http://www.city.tsugaru.aomori.jp/kizukuri/index0.html">http://www.city.tsugaru.aomori.jp/kizukuri/index0.html</a>
実践の概要	・4 年生 1 組、青森県板柳町 ・町の郷土資料館→昔の民具、農具、町の歴史を知る展示 解説はお年寄り ・馬具作り {吉田さん。敗戦後、馬具職人の道へ。農業の機械化に伴い、農耕馬が消える。馬力大会用、観光馬車の馬具を作る。土佐から土佐犬用首輪など注文が全国的に。「革工房よしだ」。馬具作りは人間の服を作るようなもの。} ・子供達の感想：馬具作りは正座で、馬の顔は人の顔よりでかい、馬具がどんな形かワクワク、「なんでそんなに戦争があるんだろう？」  ・教室で「革工房よしだ」の授業→後日、取材(デジカメ、カメラ；子供達による撮影) ・店内 {バッグや手提げ袋のレイアウトがある。子供の誕生時の体重と身長を同じにして作るベースデーベア。思い出のランドセルを裁断して可愛く小さなランドセルに作り替える。材料の革、ベルト、剪定鋏、ナイフの鞘など。【感想】仕事場は宝箱、ゆめいっぱい}	中学 美術の教育実践では、右脳を使った描画法を試みている。「この右脳を使った知覚を妨げているのが、左脳の知覚なのだ」と指摘している。左脳は言語的、分析的、象徴的、論理的であるが、右脳は非言語的、総合的、具体的、直感的と考えられている。これらの描画法を、風景画や学級ポスターのレタリング等へ応用してゆく。  海外の馬の様子を知る手がかり。本来は 19 世紀、パリの様子を学ぶ (印象派 (ドガは競馬の風景を描いている) などの芸術と関連して文化を探る) 馬車の文化史、競馬などについて調べることができる。馬の文化史的側面を学べる	かつて木造町で行われていた馬市「馬っこ市」は、農耕馬の市として東北三大馬市に数えられていた。しかし、農業の機械化が進んで馬の競り市が年々衰退していったため、昭和 50 年から巨大な馬ねぶたを曳いて町内を練り歩く「馬子まつり」へと変わった。平成 18 年から夜店は馬市まつりに開催され、同時にレベルがとても高い「上原げんと杯争奪のど自慢大会」など、市民自ら作り出すさまざまなイベントや催しが行われ、多くの人で賑わう模様。  東京・目黒区でも農耕馬をモチーフにした町おこしのものがある。目黒区では農耕の歴史、目黒競馬場の歴史など馬との関わりをアピールした町おこし鎌倉街道、駒場東大前 (江戸将軍の鷹狩り場)、浮世絵に見る目黒→住宅街と農村地帯というギャップ目黒美術館と共同→2007.10.15-11.25 まで「馬と近代美術展」 ★目黒区と馬の関係→目黒区と青森・木造町での深い関係を築ける。
実践の中の生活陶冶	馬と生活の関連を探りながら、現代生活がどのように便利になっているか。昔の人はどのように生活していたのかを、馬と関連付けながら勉強。	19 世紀パリでどんな生活が行われていたかを調べることで、自分たちの今と比較する  描画法の教育実践で、感性を養うとともに、これを応用していろいろな感受性を養うのに役立つ。	興味のある馬を使った生活・祭りをしていくことで、町おこしへと繋がる。青森県でも有数の「馬ねぶた」が見られる場所なので、町の活性化、自身の職業へと変貌。

	<p><b>②からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・馬は日本だけが使っていたのではなく、世界各国の人が生活に利用していた</li> <li>・馬と生活の密着</li> <li>・馬が最近まで生活と密着していたという歴史をしる</li> </ul> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・馬と地域おこし・祭りの関わり、馬の勉強をしてきてよかったと思われるような勉強</li> <li>・青森県で地域振興に馬を使っているところがあったのか！ という発見と、それに参加できるような意欲をわかせる。</li> </ul>	<p><b>① からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実践で馬具作りの体験を経ている。馬と人との関わりを調べている。</li> <li>・教育実践を経て、絵を描きたいと思った子供の実力を育てることになる。</li> </ul> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・馬と地域おこし・祭りの関わり、馬の勉強をしてきてよかったと思われるような勉強</li> </ul>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実践で馬具作りの体験を経ている</li> <li>・義務教育を青森県で過ごし、高等教育で東京に触れ、町おこしで故郷に帰ってくるという構図ができ、より町おこしに力を入れることができる。</li> </ul> <p><b>②からみた教育的意味</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実践を経て、馬と絵画、馬と生活、馬と祭りの関わりについて考察できたことで地域おこしにつながっている。</li> </ul>
--	---	---	--

○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

青森県は、「馬」と人との関わりが、いまだに深いところだと思った。これは教育実践に「馬具作り」があったように、それが発展して町おこしで「馬ねぶた」がある。つまり農業で地域を成り立たせてきた歴史があるということだろう。さらに「ねぶた」は青森県独特の祭りの「伝統」でもある。それらを育てることで、地域振興だけでなく、愛国心のようなもの（愛国心という大袈裟かもしれないけれど）を育てていると思う。

さらに面白いのは、この地域振興を行っているところが青森県「木造町」という点がある。木造町は、地域振興に力を注ぐところで、数年前も木造町の駅に土偶の巨大建造物を作り上げるなどしている。（木造町亀ヶ岡遺跡から発掘した遮光器土偶をモチーフに作った土器 <http://www.city.tsugaru.aomori.jp/kizukuri/index0.html>）

先に木造町の町おこしを見つける前に、東京・目黒区が馬との関係が深いということを知って、それを町おこしとして扱おうとしていたが、青森県の地域振興を見つけたことで、大学などの高等教育を東京やほかの地域でやれていても、また故郷に戻るきっかけにもなるな、と思った。そういう意味ではまた帰る場所ができて「生活を作る」ところに繋がると思う。

こうやって一通り考えていると、馬を使うという地域の特性を売りにした町おこし、という観念が壊れていき、教育の段階で「町おこしのための人材育成」をしていたのかな、と思った。しかもそれが農業、とかでないのに注目できる。青森は農家が多いから、農業等の教育実践は珍しくない。さらに地域振興をして、それが成功につながった時に、小学校のときの「馬具作り」教育実践がもとになっていたんだな、と考えることができれば、それはある意味で生活陶冶にも繋がっているのだなと感じた。地域振興には地域の特性、歴史を踏まえ、さらに技術教育、専門的な知識を経ていることが大事だなということ。

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1月8日コロロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (6) 年生	② 中学・高校・大学 (中学校・大学)	③ 地域・社会 ( 町・村おこし)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あつ！こんな教育もあるんだ』新評論、1996年。 「竹の子堀から竹の学習へ」 (pp. 76-82)	1. 読売新聞 「生活を支えてきた竹」 <a href="http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/children/study/20060203mi01.htm">http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/children/study/20060203mi01.htm</a> 2. 地域貢献 徳島大学 竹の研究 <a href="http://dmuseum.ias.tokushima-u.ac.jp/~chiiki/chi.html">http://dmuseum.ias.tokushima-u.ac.jp/~chiiki/chi.html</a>	竹の子堀研究会 福島県 <a href="http://www.webinfo.co.jp/izumizaki/">http://www.webinfo.co.jp/izumizaki/</a> <a href="http://www.popland.jp/webinfo/izumizaki/">http://www.popland.jp/webinfo/izumizaki/</a> repoto/kouryuu0706/kouryuu_0706.html 歓声上がる竹林の子ら 岡山倉敷
実践の概要	① 校区に残っている竹林で竹の子堀 ② 竹の研究、竹の子を絵で書き研究する。各家庭で調理して食べる。レシピを持ってくる。 ③ 竹製品を集め研究し、使う。 ④ 竹の学習を発表し、竹製品を作る。	1. 生活を支えてきた竹、工業製品として使われてきた竹について学ぶ。竹製品の歴史や日本人がどのように竹と関わってきたのか学ぶ。実際職人のところに行き話を聞いたり、体験をする。 2. 竹の利用研究～竹パウダーの利用開拓 農業分野での利用、便秘の解消効果作用、パウダー利用した育苗ポット、など研究し、実際に活用してみる。	竹の子、竹を利用し町おこしを行う。その一環として、里歩き、竹の子堀研究会を催す。取ったものは料理を皆で食べる。料理の研究。 地域一体となり、特産の研究をしたり、その文化を子供たちに伝承していく。ものづくりを町おこしに利用。 職場体験学習やゆりの時間の支援を行う。
実践中の生活陶冶	<ul style="list-style-type: none"> <li>食べ物(植物)の成長過程でき方を知る。</li> <li>どんな食べ方をするのか。</li> <li>どんなことに使えるのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>竹の歴史や職人のところに行き自分が体験する。</li> <li>文化の伝承</li> <li>大学の研究としての学びの効果、地域貢献の意味もある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>町を盛り上げる。</li> <li>自然を利用し地域を活性化</li> <li>竹を利用した地域交流、観光地作りへ</li> </ul>
	<p>②からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小学校で体験しているので、より興味を持ち、理解しやすい授業、研究ができる。</li> <li>体験を活かすことができる。</li> <li>興味が深まる。</li> </ul> <p>③からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>知ってもらうことで、文化、伝統を伝承してもらう。</li> <li>いろんな世代で町おこしを学ぶことができる。</li> </ul>	<p>①からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>より詳しく学ぶことができる。</li> <li>「なぜ学んでいるのか」を意識しやすく、理解できる。</li> </ul> <p>③からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の特産を研究してもらうことで、地域活性化に貢献してもらえる。</li> <li>共に研究することで、交流、輪が広がる。</li> </ul>	<p>①からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活の一部、自然について考える。</li> <li>実感がわく。将来の自分を意識し、進路的意味も加わる。</li> <li>いろんな人たちと触れ合うことができる。</li> </ul> <p>②からみた教育的意味</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究材料になる。</li> <li>地域交流になり、より研究や体験に深く取り組むことができる。</li> </ul>

○ コロロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

コロロキウムを通して、一つ一つで考えたら全く別のもので、ヨコのつながりを考えることで、共通のつながりや意味が見えてくるということを学びました。また、一方通行の考えではなく、タテのつながり、ヨコのつながりが存在することで、生活陶冶が上手く成り立っているんだと感じました。自分の教育実践もつながりを上手く利用して、学びを活かしていきたいと思いました。

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校(2)年生	② 中学・高校・大学 (地域の祭りへの参加、地域産業の活性化についての学習)	③ 地域・社会 (千葉県長柄町における町おこし)
出典および参考資料	<p>I. 行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006 年。「竹の子掘りから竹の学習へ」(pp. 76-82)</p>	<p>I. 武蔵大学HP ゼミ 経営学科 <a href="http://www.musashi.ac.jp/modules/seminar_economics/index.php?content_id=13">http://www.musashi.ac.jp/modules/seminar_economics/index.php?content_id=13</a></p> <p>II. 大阪府長南校区地域教育協議会 <a href="http://www.pref.osaka.jp/kyoisomu/kokoro/c/hiiki/m_pdf/m36-45.pdf">http://www.pref.osaka.jp/kyoisomu/kokoro/c/hiiki/m_pdf/m36-45.pdf</a></p> <p>III. 木更津市少年自然の家キャンプ場 <a href="http://www.city.kisarazu.chiba.jp/life/gakushu/sho/gai/kyoiku_seishonen.html">http://www.city.kisarazu.chiba.jp/life/gakushu/sho/gai/kyoiku_seishonen.html</a></p> <p>IV. 聖学院大学政治経済学部 <a href="http://www.seigakuin.jp/contents/faculty/com/02c/lassinfo03.html">http://www.seigakuin.jp/contents/faculty/com/02c/lassinfo03.html</a></p> <p>VI. 和歌山県教育センター <a href="http://www.wakayama-edc.big-u.jp/tayori/H19-2quarterly_natu.pdf">http://www.wakayama-edc.big-u.jp/tayori/H19-2quarterly_natu.pdf</a></p>	<p>I. たけのこで町おこし(千葉県長柄町) <a href="http://www.chiba.info.maff.go.jp/toukei/sokuho/genchi/joho1111.html">http://www.chiba.info.maff.go.jp/toukei/sokuho/genchi/joho1111.html</a></p> <p>II. 八街市教育委員会 たけのこの里 <a href="http://www.city.yachimata.lg.jp/top/new/takenoko.html">http://www.city.yachimata.lg.jp/top/new/takenoko.html</a></p> <p>III. 真里谷城跡たけのこ祭り <a href="http://www.kisacn.jp/html/news/boso/1177337580.php">http://www.kisacn.jp/html/news/boso/1177337580.php</a></p>
実践の概要	<p><b>I. 『あっ！こんな教育もあるんだ』</b> 学校近くにある竹林で竹の子掘りを行い、必要な道具の使い方などを教わりながら実際に竹の子掘りを体験。その後持ち帰った竹の子を題材に絵を描いたりして竹の子についての関心を深めていく。さらに竹の子と笹の違いや身近な竹製品を集めて自分達で作ってみたり調べたことを発表したりして竹に関する理解を深めていく。さらに地域の老人総合センターに赴き地元の人と交流しながら竹の学習を深める。</p>	<p><b>I. 武蔵大学経済学部経営学科ゼミ 黒岩ゼミ</b> 卒業生が経営する婦人バッグ企業のインターネットによるマーケティング戦略を策定し、社長にプレゼン。</p> <p><b>高橋ゼミ</b> 事業計画書(ビジネスプラン)の作成。2006 年度は、緑茶カフェ、自分史制作のサポートなどが企画され、年度末には、他大学のゼミを交えて、発表大会を行う。</p> <p><b>II. 長南校区地域教育協議会</b> 地域の一大イベントである「ふれあい祭」に中学生が主体的に参加し、イベントを盛り上げるとともに、将来の地域リーダーとしての自覚を育てる。</p> <p><b>III. 少年自然の家キャンプ場</b> 豊かな自然環境の中で集団生活を通して人間性を育むと同時に、歴史的資産である施設についての知識を得てもらう。キャンプ時の内容は、たけのこ狩り、真里谷城址歴史探索、野外料理の実習、植物観察、竹細工である。</p>	<p><b>I. 千葉県長柄町の町おこし</b> 長生郡長柄町の自然休養村センター隣接地に「竹炭」専用の炭窯工房が完成し、10 月 22 日に稼働を開始した。町の特産品はたけのこだが、竹を町おこしに役立てようと、たけのこ生産者が中心となり炭窯管理組合(安藤衛組合長)を発足させた。工房には窯が二つあり、一つの窯で1回当たり約 300kg の竹炭が焼ける。竹炭は消臭や防虫効果があり、近年の健康ブームも手伝い入浴剤や飲料水の浄化等にも使われ、幅広い用途が考えられている。同組合の安藤組合長は「町のイベントなどを通してPRを強化し、販売量の増大を目指したい」と語っており、町でも新しい振興策として「長柄の竹炭」を売り出したいと期待している。</p> <p><b>II. 八街市教育委員会 たけのこの里</b> 子どもたちに自然体験型の学習機会を提供することにより、子どもたちの調和のとれた人間形成を図ることを目的として造営された施設。利用方法は利用届けを前日までに提出するだけで利用可能。</p>

		<p><b>IV. 聖学院大学</b>          大学 NPO と協力してコミュニティ作り実践の一環として「竹炭づくり」を体験できる。これ以外にも野菜づくり、ホテル再生プロジェクト、町作り、イベント企画がある。</p> <p><b>VI. 和歌山県教育センター</b>          有田川町立鳥屋城小学校で大学教授が出前授業を行い、備長炭電池を使って電流の実験を行う。炭の性質を知るだけでなく、理科についての関心を持たせることが出来る。</p>	<p><b>III. 真里谷城跡たけのご祭り</b>          真里谷城跡たけのご祭りは実行委員会、木更津市教育委員会と富来田地区振興対策協議会により真里谷の同城址・少年自然の家キャンプ場で開催される。真里谷城は、今から五百数十年前、甲斐の武田氏が築いた房総を代表する中世の山城で、この地方の政治や軍事的拠点となっていた。この祭りは、地域の豊かな自然と歴史文化の特性を活かしたまちづくりの一環で、自然とのふれあいの場を創出。真里谷城の歴史文化を紹介し、地区内外の人との交流の場を提供すると共に、里山の保全・活用やキャンプ場の利用促進、地域活性化を目指すもの。穏やかな日和に恵まれたこの日は、首都圏方面から親子連れ約 3000 人が訪れる。主なイベントは、竹の子狩り(1 人 2 本まで無料)をはじめ、本丸ステージでの郷土芸能、地域ボランティアが掘り立てでアクのない竹の子で炊きあげた『竹の子ご飯と竹の子汁』の販売を行い、また、歴史ガイドの案内による散策、野点、竹細工実演の他、地元農産物直売や各種模擬店等多彩に繰り広げられる。</p>
<p>実践の中 の生活 陶冶</p>	<p>たけのご採集と竹学習を経験することで、実際にたけのこを採る際に必要な道具の使い方やたけのこを上手に採る方法を知ることが出来る。その経験を得られることで将来、自然に携わる仕事、食物を研究する仕事、おもちゃを作る仕事などに興味を持つことが出来るのではないだろうか。</p>	<p>地域のイベントを主体的に企画運営することで、生徒は自発的に自分達の発想を形にすること、その発想を形にするのにどのような取り組みが必要なのかを学べると考える。その経験から何かを新しく発案、企画していく仕事に興味を持てるのではないだろうか。例えば旅行会社で新しい旅行プランを考えるようなことが挙げられると思う。</p> <p>武蔵大学のゼミはビジネスプランの作成、インターネット上での広告戦略が学ぶことが出来る。そのことを通じて物をただ販売するのではなく、効果的かつ効率よい販売についての力をつけられる。それによって物を計画的に販売していくことに興味を持ち、それらを実践できるような広告代理店などの仕事にも興味を持てるのではないだろうか。</p> <p>聖学院大学のゼミでは実際に竹炭を作成している。そのことから竹を竹炭にアレンジすることが体験できる。このような経験を通じて、将来に竹炭を作る職人を目指すことを考えられるかもしれないし、また NPO と協力していることから NPO の仕事にも興味を抱けると思う。</p> <p>大学教授が小学校に出前授業で備長炭で理科の実験を行うことを通して、純粋に理科というものに興味を抱き科学者や技術者の道を目指せる</p>	<p>地域の特産を活かしたイベントの運営、企画に参加、実際のイベントにも参加することで地域主体の町作りが出来ると思う。それは地域のイベントを企画運営するだけでなくそのイベントを通じて得られる交流から、子供が生活舞台出来る環境を作り上げることが出来ると思う。また地域特産の竹炭を販売することに興味を持つ人が進んでこのプロジェクトに参加できるのではないかと思う。たけのこの里を作ることで、この里を管理し、来場者にその魅力を伝えることで来場した人たちに多くの関心を持たせることが出来るのではないかと思う。</p>

		だけでなく、炭の新しい可能性に気づくことで炭を作ることに興味を持ち、そしてそれを使った商品を作ることに興味を持てるのではないかと思います。	
<p><b>②からみた教育的意味</b> たけのこに身近に触れることによって、発展的に学習するきっかけを提供することが出来る。</p> <p><b>③からみた教育的意味</b> 地域の特産であるたけのこに小さい頃から触れあい、自分達の地域を知るきっかけを得ることが出来る。また、③のⅡで紹介したたけのこの里を設置することによって毎年地域の子供達にたけのこに触れる機会を設け、将来にも地元の良さを残すことが出来る。</p>	<p><b>①からみた教育的意味</b> 小学校時にたけのこ学習を通じて得た体験を、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで発展させることが出来る。Ⅱでは、地域主催の祭りに自分たちが主体的に参加することを通じて自分たちの地域に関心を抱いてもらい、Ⅲ、Ⅳでは地域の歴史を学習した地域特産の食材を活かした料理を作ることを通じて、自分たちの地域の歴史と地域の特徴を、体験を通じて知ることが出来る。</p> <p><b>③からみた教育的意味</b> Ⅰで取り上げた武蔵大学経済学部のゼミを通して地域振興を行うにあたって、プロジェクトを成功させるための販売計画を立てるノウハウを学習することが出来る。また地域振興に必要な人材の育成、人脈の形成、イベントに参加することによって地元の楽しさ、良さを経験することが出来る。</p>	<p><b>①からみた教育的意味</b> 小さい頃に自分達が体験したものを「竹炭」という形で発展させることが出来る。また①のⅡの理科の実験を通じて、炭について興味を持たせてあげることができ、その炭の発展的利用が出来る。また地域全体が交流でき、そして地域外にもアピール出来る祭りに触れることで地域主体のイベントに参加することの楽しさを知ることが出来る。</p> <p><b>②からみた教育的意味</b> ②で学習してきた地域振興のために必要な販売戦略を竹炭の販売、アピールの場面で活かすことが出来る。地域の歴史を学習することによって地元に対して関心を深められると同時に地元のアピールに活かすことが出来る。地域祭を自主的に企画し自発的に参加することでイベントに参加する楽しさ、企画する楽しさを経験することが出来、その経験を地域振興に参加する形で役立てることが出来る。</p>	

○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

今回のコルロキウムでは、4年生が多いグループでやらせてもらったため自由に話すことが出来たのだが、この「たけのこ」をテーマに学習出来る地域はあまり多くないかもしれないが、たけのこから発展させることでかなり広い生活指導が出来るのではないかと感じた。一つのテーマから発展させられる方向性はとても広く、今回のコルロキウムでも自分が提示した「竹炭」だけではなく、竹を使った様々な製品や様々な商品のアピール方法があることが分かったからである。例えば一つの例で挙げたのが「竹炭のブランド化」という案だった。このことを通して、今まで自分が経験してきた社会化実習などの授業もこの一部として行われてきたと思う。特に小学校のときにこのような授業が多かったように思われ、中学高校になるにつれて講義的な要素が増え、発展的な授業が減ったように思う。この生活指導は、一つのテーマから様々なものに発展出来、生徒にとっては将来の自分への可能性が広がるものだと思うので、自分が実践する際には一つの教える教科からテーマを広げられ、そして生徒が楽しめる授業として実践できたらと思う。



(2007年度武蔵大学「生活指導研究」1月8日コルロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (1) 年生	② 中学・高校・大学 ( 大学 )	③ 地域・社会 ( 地域 )
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あつ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006年。 「どんぐりから粉の世界へ」 (pp.60-)	武蔵大学 『知と実践の融合』 生物学実験講座 <a href="http://www2.musashi.jp/drupal1/kiso/?q=node/3">http://www2.musashi.jp/drupal1/kiso/?q=node/3</a>	諏訪商店街『どんぐりパン』  香川県県民総参加の森作り『どんぐり銀行』
実践の概要	小学校1年生は落ち着きがなく、みんなで学ぼうとするクラスの雰囲気がない。そこで、《みんなで学ぼうとする素材》が身近にないか考える。 身近に手にとって見られる『どんぐり』を使った工作やだんご作りを通して、疑問を発見する力や、みんなで一緒に調べる力を身につけさせる。 子どもたちも動くが、先生や保護者の方も動くことの大切さ。(学校・家庭・地域の連携)	どんぐりの豊凶の持つ意味をどんぐり個数の季節変化から考える。 どんぐりの数を調べるためのトラップを9号館前の様々な箇所に設置する。どの位置が一番落ちやすいか調べる。 身近などんぐりも、じっくり見ると、不思議がたくさんある。学生として4年間を過ごした大学の自然を心に刻む良い機会でもある。	どんぐりの粉を使ったパンのお店『どんぐりパン』では知的障害を持っている方がお店を開いている。障害のある人と触れ合う機会になる。 商店街の活性化にも貢献できる。  どんぐり銀行では、どんぐりを集めて苗木として払い戻したり、森林体験をしたりして、積極的に森林作りに参加する。
実践中の生活陶冶	◎どんぐりについてもっと知りたいと思う『学習意欲』の形成。 ◎自ら課題を見つけ、調べる力。 →解明の面白さを発見！ ◎仲間と学びあう力。 →協力して疑問を解決していく。	◎大学の構内に生きている身近な植物や昆虫などを材料にして自然の仕組みや生物の多様性を理解する力。 ◎実験・観察をすることでわかる感動。 →解明の面白さ！	◎どんぐりパンという名前に興味をもって参加する子どもも出てくる。→自ら参加しようという意志の芽生え。 ◎環境問題について考える力。 ◎思いやりの心。 ◎偏見をなくす。
	②からみた教育的意味 身近なものを使って、子どもたちの興味をひくことの大切さ。どんぐりについてじっくり学ぶための前段階である。中学・高校・大学でもっと調べようと思う子どもを育てるきっかけに。  ③からみた教育的意味 どんぐりで森林づくりが出来る事の素晴らしさを知る。どんぐり団子だけではなく、どんぐりを使った食べ物には他にもたくさんあることを発見できる。 地域の人々と交流し、商店街も活性化できる。コミュニケーション能力の向上	①からみた教育的意味 小さい頃にどんぐりについて興味を持つことで、もっとどんぐりについて深く調べようとする力がつく。 興味→研究に！  ③からみた教育的意味 環境問題について考えるきっかけになる。身近なところから自然を観察することで、森林の大切さを理解するようになる。 緑の多い学校のほうが心地よいと気づく。 →森林の大切さ。	①からみた教育的意味 ①での経験を通して、もっとどんぐりで何かできることはないか考える子どもが増える。それによって、『パンを作ってみよう』『森林活動がしたい』と思うようになり、自ら動く力が強くなる。  ②からみた教育的意味 ②の大学の授業を受けたことによって、ボランティア活動に積極的に参加しようとする学生が出てくる。

○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

身近なものを扱って、子どもたちに興味を持たせることはとても良いアイデアだと思いました。身近なものの方が自分たちで調べようとする意欲を持ちやすく、自分たちで行動しやすいと思います。私の教育実践でも、身近なものでチャレンジしてみようと思います。

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日 コルロキウム課題)

○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 ( 1 ) 年生	② 中学・高校・大学 ( 埼玉県立松山女子高等学校 )	③ 地域・社会 ( どんぐり銀行 )
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あつ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006 年。 「どんぐりから粉の世界へ」(pp. 60 -67)	埼玉県立松山女子高等学校 「松山女子高と小学生の交流事業」	香川県環境森林部みどり整備課 森づくりグループ 「どんぐり銀行」 <a href="http://www.pref.kagawa.jp/rinmu/donguri/">http://www.pref.kagawa.jp/rinmu/donguri/</a>
実践の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんぐりを通して、生徒の関心をひき、学ぼうとする意欲を持たせる。</li> <li>・保護者も参加しての、どんぐり団子づくり。</li> <li>・どんぐりを通して、新しい疑問を抱き、それを解決する為の糸口を探る。</li> <li>・地域の方にも協力してもらい、そばの実と石臼を使い、実際にそばの実をひく体験もする。</li> <li>・素材から広がるドラマに驚き、その謎を自分達で解決していった子供達であるが、「仲間に伝えたい」という気持ちや大人たちも巻き込んだことにより、互いに学び合う体験となった。</li> </ul>	この交流事業では、小学生の授業に参加し、勉強を教えると共に、環境問題を考える為に、どんぐりの植樹による自然保護活動を小学生と共にしている。勉強だけでなく、何か一緒にできることはないかと、松山女子高校の生徒会が提案し、実現した。小学校の苗畑にどんぐりを埋め、春になり、苗木となったところに近隣の公園に植樹をする。環境問題やどんぐりについて調べたことを、小学生がわかりやすいようにまとめ、小学生の前で発表もする。また、小学生と共に、どんぐりでクッキーを作り、地域のバザーで販売した。	どんぐりを集めて苗木として払い戻すといった緑化活動が主な目的のシステム。また、預金者の人に「どんぐり通信」というダイレクトメールを年4回希望した人に送っている。この通信には県内での森づくり活動(どんぐり銀行活動)の案内が載っていて、森林体験ができるようになっている。どんぐり預金をきっかけに、県民参加による森づくり活動や、自然観察やクラフト等とおした森林体験をしてもらうことによって、積極的に森づくりに携わってもらいたい思いがある。現在、県内にいくつかのフィールドがあり、ボランティアの人の協力と共に運営している。
実践の中の生活陶冶	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんぐりを使った工作や料理が作れるようになる。</li> <li>・そばの実と石臼の使い方を知る。</li> <li>・仲間と共通の目的を持って、取り組む。</li> <li>・学ぶ事や解決することの楽しさを知る。</li> </ul>	どんぐりを通して、環境問題に取り組めることを知る。小学生と接したり、地域のバザーに参加することによって、地域とのコミュニケーションを図る。自分達で何かできることはないかを考え、実行する。	森づくりという共通の目的を持って取り組む。どんぐりを通しての地域活性化。森づくり活動や森林体験によって、仲間を作り、環境にやさしいモノを作ることを学ぶ。フィールドを通して、同じ目的を持った仲間の輪が広がっていく。
	<p>②からみた教育的意味</p> <p>どんぐりに興味を抱き、その様々な可能性を見出したこと。</p> <p>自分達で学び、解決することの楽しさを学べたこと。</p> <p>共通の目的を持って取り組んでいること。</p> <p>③からみた教育的意味</p> <p>目的を共有し、道具を使って、モノを作ることを知る。</p> <p>自分ができること(役割)を考え、実行する。</p>	<p>①からみた教育的意味</p> <p>どんぐりに興味を抱き、その様々な可能性を見出したこと。(環境問題、クッキー作り)</p> <p>①よりさらに地域の人とのコミュニケーションが図れたこと。</p> <p>共通の目的を持って取り組んでいること。</p> <p>③からみた教育的意味</p> <p>どんぐりを通して、環境問題に取り組めるということを見出したこと。</p> <p>どんぐりを通しての地域活性化。</p> <p>共通の目的意識を持つこと。小学生や地域の人等、仲間の輪が広がっている。</p>	<p>①からみた教育的意味</p> <p>目的を共有し、道具を使って、モノを作ることを知る。</p> <p>自分ができること(役割)を考え、実行する。</p> <p>1つの素材で、様々な可能性を見出したこと。</p> <p>②からみた教育的意味</p> <p>どんぐりを通しての、環境問題取り組みをさらに発展させることができた。</p> <p>どんぐりを通しての地域活性化。</p> <p>共通の目的を持って、仲間の輪が広がっている。</p>

○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

ただその場で学ぶものではなく、ヨコへのつながりを沢山持てるような授業をしたいと感じた。また、子供を育てる為に、ただ知識を与えるのではなく、生活を通して、仲間やモノをつくること、目的を共有することなどを学んでいくことが大切なのだと思った。

## 【これからの生活指導】



(2007年度武蔵大学「生活指導研究」1月8日コロキウム課題)

### ○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (2) 年生 東京・私立和光小学校	② 中学・高校・大学 (山形県立置賜農業高等学校 飯豊分校)	③ 地域・社会 (日本ハム株式会社)
出典 および 参考 資料	行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006年。 鎌倉博 「本物のパンをめざして自分の体を見つめ友達とつながる」 (pp. 202 -210)	『山形県立置賜農業高等学校 飯豊分校HP』 <a href="http://www.okitama-ah-b.ed.jp/">http://www.okitama-ah-b.ed.jp/</a>	『日本ハム株式会社HP～アレルギーへの取り組み～』 <a href="http://www.nipponham.co.jp/quality/allergy/index.html">http://www.nipponham.co.jp/quality/allergy/index.html</a>
実践の 概要	食物アレルギーを通して、食を見つめ、健康と命について考える。 生活勉強の単元「麦からパンへ」を題材に、1年生の秋に小麦の種を播き、麦踏みや収穫、脱穀、粉挽きと実際に麦作りを体験した。 1学期末にパン作りを開始した。まずはパンの作り方について学習し、実践へ移る。アレルギーの子の参加は保護者と相談し、進めていく。第1回目のパン作りは、アレルギーの子が食べられないことを確かめてもらうための実践。 生徒の夏休みの発見を活かして、米粉でのパン作りを開始した。試行錯誤の結果、アレルギーを持った子でも食べられるお米パンが完成し、お米パンを学校行事で販売する。	「玄米の普及と食生活の改善をめざす」研究の事前学習として玄米の栄養価について調べた。さらに、玄米加工品の開発、無農薬有機栽培の稲作、普及活動と取り組みを広げた。 水稲・合鴨同時作による無農薬有機栽培を実施。町内の児童を迎え農業体験会を行う。 玄米の調理の仕方や、玄米料理の開発へ取り組む。焼きおにぎりやチャーハンにすることで玄米特有の硬さやにおいを改善した。玄米を粉にこしてもらい、団子やケーキを作る。試行錯誤の結果、卵・小麦粉・乳製品を使用しないアレルギーの人でも食べられるケーキを作る。	「みんなの食卓」シリーズは「おいしさに安心をそえて」というコンセプトのもと、アレルギー物質特定原材料の卵・牛乳・小麦・そば・落花生の5品目を使用せず、またこれらの材料を一切持ち込まない食物アレルギー対応食品専用工場ではムやソーセージなどを製造している。また、味についても通常のものと同様になるよう工夫して作られている。 1996年より「食物アレルギーの方々やそのご家族に安心して美味しい食事を楽しんでいただきたい」との考え方で「食物アレルギー対応食品」や「食品中のアレルギーの検査技術」の研究開発に取り組んでいる。 特定原材料5品目の混入を検出するキットを開発する。 アレルギーに配慮したレシピ集を発売する。
実践の 中の生 活陶冶	実際に種を播き、麦踏みや痛みに堪えて収穫、脱穀機を使わずに手作業での脱穀、様々な道具を使って粉を挽き、一から手作業で全てすることで食物を育てる苦労や喜び、命の大切さを知ってもらう。命あるものに愛情を持ってもらうことができる。 パン作りを通して、自分の体や友達の体について知ること、相手を思いやる気持ちが芽生える。また、健康や命の大切さを知ることができる。 幾度々なくパンを試作していくことで、諦めない気持ちや助け合いながら目標に向かって突き進む根性が身に付く。	事前学習で、玄米に関しての新たな発見やこれからの学習への意欲が高まった。 実際に稲を育てることで、食物を育てる苦労や喜び、生きることや命の大切さを実感しながら学べる。 児童とともに体験することで、伝えていくことの大切さを感じる。 玄米を使った料理を考えていくうちに、諦めない心とチャレンジ精神が生まれる。 アレルギーを持った人のためという点から人を思いやる気持ちが生まれる。 生徒同士協力してやることで、助け合う力が生まれる。	有名かつ大規模な会社が、食物アレルギー対応食品の開発に取り組むことで、多くの人が食物アレルギーについて考えるようになる。また、会社自体でも食物アレルギーについての関心が高まる。 食物アレルギー対応食品の販売が、社会への貢献につながり、会社の成長への意欲につながる。また、世間の人々の興味を高め、食物アレルギーについての知識が広がる。 専用の工場を設立することで、食品の安全性についての関心が高まり、食という観点から命の大切さについても知ることができる。

<p><b>②からみた教育的意味</b></p> <p>身の周りの人の体について知ることは、命の大切さを学ぶ一歩。</p> <p>実際に、食物を育てることで、生きるとは何か、生と食がどう関係しているか知ることができる。</p> <p>友達と協力して実践することで、助け合う心が芽生え、思いやる気持ちをもつことができる。</p> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <p>身近なところから取り組むことで、食物アレルギーについて関心を高めていっている。</p> <p>友達のためのパン作りが多くの食物アレルギーをもっている人たちの希望につながる。</p>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <p>アレルギー除去食品を学習に取り入れ、大会で発表することで食物アレルギーについての世間の関心を集め、話題を広げている。</p> <p>食物を実際に育て、それを他の誰か共有してもらうことで命のリレーへと繋がっている。</p> <p><b>③からみた教育的意味</b></p> <p>一部だけでなく全体で取り組むことで、大きな力を持って、考え・行動することができる。</p> <p>公共の場へ公表することで、多くの人たちへ伝えることができる。注目度や関心度が上がる。</p>	<p><b>①からみた教育的意味</b></p> <p>安心で安全な食品作りを心がけることが、人々の健康や命を守っていることに繋がっている。食が生きることと切っても切れない関係であることを証明している。</p> <p>身近な人だけではなく、大勢の人へ関心・思いやる心を持つということの大切さを気づかされる。</p> <p>お互い支え合いながら、受け入れながら生きていくことを表している。</p> <p><b>②からみた教育的意味</b></p> <p>大勢の人に知ってもらうことで、更なる発展へと繋げていっている。</p> <p>安心で安全な食品を開発することで、その力を必要としている人たちの生きる支えとなっている。</p>
--	--	---

## ○ コルロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと

食物アレルギーという点だけで共通しているこの3つの実践からは、食を通して人々の健康や命を守っていくことの大切さを感じることができました。そして、仲間のことを思いやり、相手を思いやることがその人の生きる支えに繋がっているのではないかと思いました。小さな力が集まって大きな力へと成長し、この社会を動かして人々は支え合いながら生きていけると感じました。簡単にあるものから何かを作ろうとはせずに、一から自分たちの力で実際に体験しながら作り上げていくことが、より良いものを作るため、そして、相手のことを理解するためには最もよい方法だと思いました。苦労や喜びを感じ、試行錯誤しながら何度もチャレンジすることが、人間の成長のために大きな力を与えるのだと感じました。諦めずに最後まで幾度々なく挑戦することが如何に大切なのか知ることができました。将来は、実際に体験しながら、答えを与えるのではなく、ヒントを与え答えは自ら導き出せるような実践を取り入れたいです。

# 【これからの生活指導】

本

(2007 年度武蔵大学「生活指導研究」1 月 8 日コロキウム課題)

## ○ 生活のひとつながり オキュペーションの発展

	① 小学校 (6) 年生	② 中学・高校・大学 (大学)	③ 地域・社会 (個人が情報発信していく 社会)
出典 および 参考資料	行田稔彦他編『あつ！こんな教育 もあるんだ』新評論、1996 年。 「子供の中で広がる総合学習 『在校生に残す一冊の本』」 (pp. 101 -108)	龍谷大学 HP 社会学部/社会学科研究  瀬田新聞 HP URL <a href="http://daimonji.sakura.ne.jp/seta-shimbun/">http://daimonji.sakura.ne.jp/seta-shimbun/</a>	地域情報誌 「それ！YAPPE (やっぺ)」 千葉県ニュースリリース 平成 19 年 9 月 26 日号
実践の概要	6 年生 3 学期最後の総合学習。 一人一人がテーマを決め、中身を作り、製本するまでを「在校生に残す一冊本」として取り組む。自分にとって「学んだ値打ち」が残る本を作るため、インタビューを行ったり、仕事体験をしたり自分の納得いくまで調査を行い一冊の本を作成した。	「地域と大学をつなぐ」を理念に学生たちが取材編集を行う、「大学発地域新聞」を作成している。 社会学部が立地している地元・大津市瀬田地区の動きや情報を学生や大学人に、そして大学発の情報を地元。身近なところにある「凄いこと」を伝える。オンラインからも読めるようになっている。	定年退職を迎えた団塊世代の「地域デビュー」を応援しようと、NPO 法人「地域創造ネットワークちば」(事務局・千葉市)が、情報誌「それ！YAPPE (やっぺ)」を創刊した。千葉県内各市町村などで無料配布している。団塊世代の経験や知識を地域で生かしてもらおうと、県は、今年度から「団塊世代等地域デビュー支援事業」を始めた。事業の委託を受けた同 NPO が、地域デビューに向けた情報提供のため、情報誌をつくった。
実践中の生活陶冶	自分の日常生活の中で、何気なく見ていたものに関心・疑問を持つ姿勢を育てる。 物事を多角的に捉えられるようになる。	地域の取材をすることを通して、自分の住んでいる地域の目が向く。地域の人々との交流や、地元の「凄いところ」を知ることによって、地元へ愛着がわく。また、自分の表現が発信されることによって、責任感が芽生える。	同世代のコミュニケーションが取れることによって、これからの定年後の楽しみが増える。新たに地域に関わることによって、地域の活性化につながる。
	②からみた教育的意味 まずは、疑問・関心をもつことの面白さを考えさせる。自分の興味の対象を調べる方法や、表現方法を学ぶ。  ③からみた教育的意味 得意分野を作る。自分の「これは！」というものを見つけられる土台を作る。	①からみた教育的意味 人に伝えるという表現方法を発達させる。自分だけの「本」から、「他人への情報発信」という意識を投げかける。自分の疑問や関心だけでなくみんなが興味のあるテーマも幅広く取り上げ、社会全体を視野に入れる姿勢を育てる。  ③からみた教育的意味 これから、長い間関わるであろう地元のコミュニティと連携がとれるようになる。自分の知らなかった地域の特色を発見することによって、地域の問題点も考えられるようになる。必要な情報とそうでない情報の選別。	①からみた教育的意味 疑問・関心・今までの経験をもとに調べたことや、取り組んだことを自分の得意分野として発信することで、地域社会全体に貢献できるようになる。  ②からみた教育的意味 今までよりも多くの人たちに情報を発信するという責任を持たせる。地域活性化につながるような情報を厳選。

	I 小学校【5】年生	II 中学・高校・大学 【大学の演習】	III 地域・社会 【日本】(京都市)
出典 および 参考資料	・矢賀睦都恵「人々の願いを感じて—尾鷲の山、ヒノキ、熊野古道」(行田稔彦他編『あっ！こんな教育もあるんだ』新評論、2006年 p.182~p.190所収)	①細田衛士・横山彰『環境経済学』有斐閣アルマ 2007年 p.1~p.25 ・慶應義塾大学経済学部細田研究会 HP <a href="http://seminar.econ.keio.ac.jp/hosoda/hhp/">http://seminar.econ.keio.ac.jp/hosoda/hhp/</a> ②『ゼミのすすめ。』武蔵大学日本・東アジア比較文化学科 2007年 p.12~p.13 ③東京農工大学農学部HP <a href="http://www.tuat.ac.jp/department/agri.html">http://www.tuat.ac.jp/department/agri.html</a>	・瀬田勝哉『木の語る中世』朝日新聞社 2000年 p.132~p.147 ・京都市情報館HP(市長記者会見2001年1月16日) <a href="http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000013424.html">http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000013424.html</a>
実践の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>伐採作業見学</li> <li>森林組合の市場見学</li> <li>森林組合の加工工場見学</li> <li>廃材での作り</li> <li>間伐作業体験</li> <li>ヒノキめぐり</li> <li>植樹体験</li> </ul>	<p>①経済理論を用いて環境問題を分析する。環境問題を解決するための経済論理を考える。論理はもちろん、実際の現場を知るためにフィールドワークに出る。</p> <p>②・「木ゼミ」…木について(どんな分野でもよい)自ら調べて報告。</p> <p>・中世の史料をよみ、その史料の内容を深く掴む。(その中で木(檜)のことが出てきたら調べる。)フィールドワークに出る。</p> <p>③・木、森林(檜)の管理、いかに適切な計画をつくるか考える。木(檜)が育ちやすい環境(土壌学等)を整える。品種を考える。</p> <p>・木、森林と人間のよりよい関係を考える。</p>	<p>②文化財を守る(まとめ役) そのために必要な人材、材料を集める。全体を総括する人材となって動く。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>②…檜皮職人になる。(檜皮をむく、竹釘を打つ等)歴史史料をよんで檜皮について研究する。</p> <p>③…材料(檜)が育ちやすい環境をつくる。檜と同じような品種の木を開発する。</p> <p>①…②の檜皮職人、③の人々がこの仕事で食べていけるよう経済の仕組みを整える。</p> <p>②の材料(環境)を守るという点においても矛盾のない経済論理を実行する。</p>
実践の中の生活陶冶	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際の森林、木(檜)を「知る」。目にするだけでなく体験、実感する。どうやって木を切るのか、どうやって木を植えるのか、どうやって木は捨てることなく使われるのかを知ることができる。</li> <li>仲間と共に、協力して働くということを知ることができる。</li> <li>一つのことには多くの人が関わっていることを知ることができる。</li> </ul>	<p>①経済と環境の問題、人に支払われる給料と環境の問題について取り組める。</p> <p>②木(檜)を通じた様々な文化・分野、人に出会う。歴史史料が読める。全体を見渡す広い視野、見識をもつことができる。</p> <p>③森林、木(檜)を科学的に知る。上記の実践が行える力、木を扱う技術力がつく。</p> <p>①②③共通：現状を自分の目で確認できる。客観的レベルで考え、人と議論できる。</p>	<p>日本の課題(日本の危機) 檜皮茸という伝統産業は文化財保護という点で仕事は十分あるのに、人と材料が足りない。(②③) 人を集められる財源不足、材料を調達する、育てる技術がない。(①) →人を集めることができる。材料を育て、調達できる。 →文化財を守るができる。</p>
	<p>〈IIからみた教育的意味〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>木(檜)についての体験・知があるので、大学で研究する際、人よりスタートが早い。より深く研究することができる。学問を身近に感じることができる。学問を生かせる場(地域)を知っている。</li> </ul> <p>〈IIIからみた教育的意味〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大勢の仲間が関わり、檜を守っていることを知っているため、協力して仕事をすることができる。また、様々な檜の姿、そこで働く人を知っているため、他分野の人を理解しやすい。</li> </ul>	<p>〈Iからみた教育的意味〉</p> <p>木(檜)と経済の問題の問題に出会っている(工場見学)①ため、森林・木(檜)について知識がある②③ため、深く研究することができる。学問を生かせる場を知っているため、学ぶモチベーションが高い。</p> <p>〈IIIからみた教育的意味〉</p> <p>提案：“木”プロジェクトを通じて大学間の連携をはかる。(学問も、文理系も関係なく)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>社会で直に活用できる知識を得ている。</li> </ul>	<p>〈Iからみた教育的意味〉</p> <p>「山の未来を考えながら、次の世代に仕事繋いでいる」ということが実感をもってわかる。現実となる。小学校での一つの「学び」が「仕事」「生きること」「日本を守ること」に繋がっている。</p> <p>〈IIからみた教育的意味〉</p> <p>自分の興味の域にあった学問が、その域を超え、普遍的レベルへ引き伸ばされる。つまり、社会のために学問を利用できるということ。学問—仕事—社会貢献が一繋がりの理想型がここに見られる。</p>

○ コロロキウムや全体を通してわかったこと・学んだこと・自分の教育実践に活かそうと思うこと→教師は生徒への教育、進路指導を通じて社会を変えられる、ということ学んだことが大きい。不安な国家政策に対して、生徒に情報を与え、生徒にこれからの日本(夢)を託すこと、それができると思った。そのために私自身が日本、地域、社会問題を把握しなければならない。そのためにも「ヨコを見ながら」勉強したい。